

県が4年後に完成を目指す「がんセンター」に小児科を設置して欲しいというシンポジウムと討論会が続けてありました。

県は患者や家族の声を反映した病院にしたいと言っていますが、生命がかかる病気に子どもがかかったときの親の気持ちは、体験したものでないとわからない苦しみで、いくら口で説明しても十分に伝わらないもどかしさを感じます。

< 第 3 5 回 ほほえみの会 >

初参加の方を含め10人が参加しました。今回は退院して晴れて小学校に入学したとたんに再入院した方や、ようやく輸血が終わったと思ったら再入院など、治療が終わったあと具合が悪くなっている方が多くいました。なかなか一筋縄ではいかない病気を改めて感じます。

新病院について話し合いました。

これから少子化を迎えようという時代に日本一を誇る「がんセンター」に小児科がないのはおかしい。

小児ガンにかかった子どもは治癒したあとも様々な病気が出ることも多く継続してみてもらう必要がある。そのためにも小児科(こども病院)だけだなく様々な科が総合的に必要となる。

骨髄移植で無菌室に入る子供と親の精神的プレッシャーは体験したものでないとわからない大変なものがある。せめて病院は近くにあっていつでも直ぐに行ける状態であって欲しい。

いま臍帯血を採ろうとしても東部の病院では出来ず、ガンの兄弟がいるために採りたくても採れないという人が多くいる。

陽子線治療は小児ガンに効果があるというのに何故小児科がないのですか。

県の子どものガンに対する関心の低さに絶望する。

病棟は大人と子どもでは違い、たとえ小児科が単独で設置されなくても小児用の病棟は是非最初から作っておいて欲しい。小児ガンについてはこども病院で高度医療を目指すというが、とても今のこども病院が満足できる状態ではない。

- ・ 20年前に建てられた病院は今の医療の進歩について行けず、骨髄移植治療が当たり前になっている今、無菌室が一つというのはどうしようもない。タイミングが重要な移植では今までに無菌室が空いていないがために治療が出来ず命を落としている人が多い。
- ・ 昨年末から病棟内での院内感染が広がっており、既に二人が亡くなっている。遺族は県に対して訴訟も考えていたが徹底的に説明して欲しい。不安が大きい。今のところ原因ははっきりしていないが、B1病棟が白血球が減り抵抗力のない血液腫瘍科の患者と腎臓や神経科の患者が一緒というのも問題ではないのか。県がんセンターは誰のための病院なのか。国立がんセンターとは性格が違うだろう。国立をしのぐほどの日本一、世界一を目指す事が本当に県民のためになるのだろうか。県のがんセンターは県民が診察を受けやすい県民本位の病院体制が大事で、ガン研究を極めるところではないのではないのか。病院の名称を「がんセンター」というのは止めて欲しい。本人や周りに対して病名を伝えておらず、たとえ小児科が出来ても診察には行けない。こども病院の血液腫瘍科も血液科で良いのではないのか。

総会のお知らせ

6月14日(日) 12時から14時

県立こども病院 新館3階 教室

97年度活動会計報告

役員選出

体験談「子どもの病気で仕事を変えました」石野誠一さん

講演「患者と家族のストレス対処法」

チャイルドライフスペシャリスト 藤井あけみさん

フリートーク

県がん への要望

小さなお子さんは預かります。面倒を見てくれる人も募集

ほほえみの会 代表 池田恵一